低学年児童期の学習

～保護者のみなさまへ～

第10回　低学年期までに大切にしたい家庭教育

中学受験生（小学校高学年）をおもちの保護者からよく受ける相談があります。それは、「ただ何となく勉強しているという感じで、受験生らしい気合いの入った勉強をしていません」「もっと覇気のある取り組みができないものでしょうか」という、勉強に向き合う**姿勢**に関するものです。親としては、受験という目標があるのだから、もっとやる気を前面に出した取り組みをしてほしいのでしょう。

しかしながら、**「目標があればやる気が高まる」と思うのは大人の発想**です。児童期の子どもは、今と将来を結びつけて考えるほどの人生経験がありません。ですから受験の動機も、「親の出身校だから」「きょうだいが通っていて、楽しそうだから」など、身近なところから生まれているのが大半で、**大人が考える受験の動機とはだいぶ違っている**のが現実です。受験合格に向けて一心に勉強に打ち込むようになるのは、６年生の後半ごろになってからのことだとお考えいただきたいですね。

では、この段階に至るまではどのような勉強の取り組みが望ましいのでしょうか。それを一言でお伝えするとしたら、「自ら学ぶ姿勢を築く」ということになろうかと思います。親に言われてしぶしぶ勉強したり、口答えをして勉強から逃げようとしたりする姿勢が染みついてしまうと、いよいよ受験対策の大詰めという段階になっても一向にやる気が高まらず、取り組みも活性化しないという事態を招きがちです。お子さんが３年生までしたら、まだどのようにでも子どもを変えることができます。今回のコラム記事を参考にし、ぜひお子さんの勉強の取り組みを改善していただきたいですね。

低学年児童期までの子どもは、遊びか勉強かの区別をしません。**「知りたい」「おもしろそうだ」**と思えば何にでも首を突っ込みます。また、子どもにとって重要なのは、自分が何をしたいかよりも、「親が見てくれているかどうか」「親が認めてくれるかどうか」にあります。興味関心が移ろいやすい年齢であるいっぽう、決めた時間に決めたことをやるルーティンが定まれば、理屈ではなく体が自然と動いて決めごとをやるようになります（まあ、これは大人も同じですが）。こうしたことを前提にして、勉強を習慣づけたり、勉強のよさを味わわせたりする経験をさせるよう配慮することで、高学年になってからの勉強への備えをしてはいかがでしょうか。

中学受験対策の勉強〈高学年期〉

1 知ることへの興味関心を育む

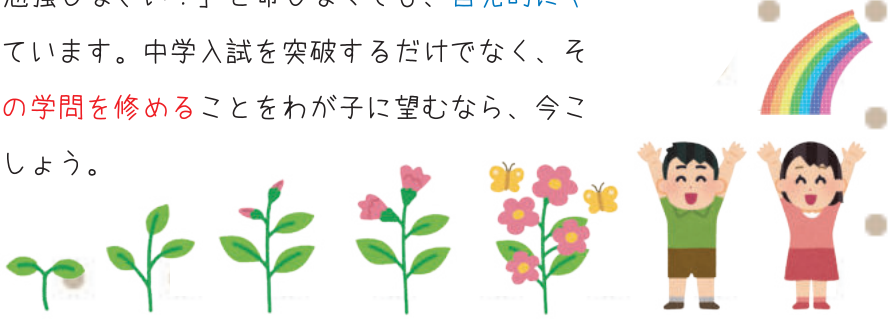
2 よい行いをほめる

3 勉強のルーティンを築く

1 のように、日頃から親が子どもの物事への興味関心を引き出すような働きかけをしている家庭では、自然と子どもは新たな知識を得ることの楽しさや喜びを経験しますから、**成長するにつれて自分から知りたいことを調べて自らの知見とする姿勢を育んでいく**ことになるでしょう。おうちにぜひ事典や図鑑を何冊か分野ごとに揃えておきたいですね。やや高価ですが、子どもの知的成長に寄与する点を考えるなら、用意しただけの成果は十分に得られるでしょう。

2 について考えてみましょう。児童期前半までの子どもにとって、自らの行動によってもたらされる成就感よりも、自分のしたことを親がどう評価してくれるかのほうがはるかに重要なことです。そのことを踏まえると、**子どもがした行為をしっかりと観察し、望ましい行動をしたときはすかさずほめたり喜んだりすることが必要**でしょう。たくさんの経験のなかで、どういうときに親がほめてくれるか、喜んでくれるかを学んだ子どもは、意図的にそういう行動を選んでするようになります。そしてやがて、そのことのもつ意味を悟り、自らの行動規範として身につけるようになるでしょう。

3 は習慣づけの重要性にもとづいた働きかけです。「遊びが先か、勉強が先か」となると、多くの子どもは「遊びが先」と答えるでしょう。しかし、親が「まず宿題を先にしよう。終わったらおやつを食べて、そのあとは遊んでいいよ」と言い聞かせ、それを日課として浸透させたらどうでしょう。面倒なことを先に済ませると気持ちがいいし、親に対しても誇らしい気分になります。そうやって、「学校から帰ったら、まずは宿題をやる」ということが**ルーティン**として定着すると、勉強をやることが苦痛でなくなる、勉強をやるのが当たり前になる、段々と勉強の楽しさもわかってくる、という好循環の連鎖が生じてきます。

どうでしょう。高学年になってから親が苦労する恐れのあることがらを、今なら未然に解決することができるのです。今、お子さんを叱って無理やり勉強させている保護者はおられませんか？ 確かに、今は親の指示に従って子どもは勉強するかもしれません。無理にやらせても、優秀だと言われるようなレベルに到達するかもしれません。しかし、この方法では子ども自らが勉強に取り組む姿勢は養えません。子どもの自我が確立する高学年になってからもこの方法が通用するとも思えません。親の働きかけでどのようにも子どもが変わる低学年児童期までにこそ、勉強の自立に向けた土台づくりのための働きかけが親に求められるのではないでしょうか。

低学年児童期の段階では、まだ**勉強の必要性を子ども自身が理解していません**から、より高いレベルをめざして自ら学ぶということも期待できません。しかし、この時期に親が勉強のよさや価値に触れる経験を子どもに繰り返しさせておけば、やがてそれが功を奏することになります。親が「勉強しなさい！」と命じなくても、自発的にやるべき勉強に向き合う子どもに成長しています。中学入試を突破するだけでなく、その先も自ら学ぶ姿勢を貫いて高い次元の学問を修めることをわが子に望むなら、今こそ自立勉強の下地を築いておくべきでしょう。